

ジョン・イング自筆書簡に見る人物像

— デポー大学所蔵資料を中心に —

北 原 かな子

はじめに

ジョン・イング (John Ing, 1840–1920) は、明治初年津軽地方弘前に設立された私立学校東奥義塾⁽¹⁾の外国人教師として1874年末から1878年初まで弘前に滞在したアメリカ人である。東奥義塾生の英語力水準を高め、1877年に教え子を母校インディアナ・アズベリー大学 (Indiana Asbury University、現在のデポー大学 DePauw University) に留学させる一方、着任半年後には東奥義塾生を中心に14名の受洗者を出すなど、津軽地方へのキリスト教普及にも貢献した。特に自らがインディアナ・アズベリー大学で言論術を鍛える方法として学んだ Literary Society の形式を東奥義塾に伝えたことは、その後の津軽地方への影響を考えると重要である。また地域の産業開発にも関わり、りんごを津軽地方に紹介した人物とする説も存在する。

このようにイングは明治初期の津軽地方においては広く影響力を持った人物だが、イング自身の人物像については、まだまだ不明なことが多かった。こうした中、筆者は日本学術振興会科学研究費補助金の助成により、去る2007年9月にデポー大学の図書館を調査する機会を得た。その際同大学図書館史料室でこれまで知られていなかったイングの自筆書簡を入手したことから、イングが弘前で過ごした様子的一端が明らかになった。

本稿では、これまでのイングに関する先行研究およびその時活用された史料状況について概観し、デポーでの調査内容、およびイング自筆書簡の内容について述べる。

ジョン・イング

最初に、ジョン・イングの人生の歩みを簡単にまとめておく。

ジョン・イングは1840年8月22日にプロテスタント、メソジスト派の牧師であった父スタンフォード、母メアリの長男としてイリノイ州に生まれた。イングは一度軍隊に入り、南北戦争に参加するが、退役後は牧師を目指し、インディアナ州のインディアナ・アズベリー大学に入学した。優秀な成績で卒業した後は、同じく牧師の娘であったルーシーと結婚し、1870年から中国伝道に従事した。夫人の健康問題により帰国を決意、その途中に立ち寄った横浜で東奥義塾関係者と出会い、東奥義塾第三代外国人教師となった。このときの給与は月額150円。まもなく夫人も教えるようになったので、夫人の分と合わせて167円がイング夫妻に支払われている。それから3年あまり弘前に滞在した頃の数々の業績については、冒頭で述べたとおりである。これに加え、「資性忠厚義氣に富める」⁽²⁾人柄であったと伝えられ、東奥義塾生の尊敬を集めた。教師としての指導能力も高く、中でもイングの指導を受けた東奥義塾生たちが明治9年の明治天皇奥羽巡幸の際に行った英語演説は、天皇を初めとして居並ぶ人々から絶賛され、東京日日新聞記者岸田吟香によって全国に報道された。⁽³⁾ また、『東奥義塾再興

十年史』によると、本多庸一と共に伝道を行う中で、当時の青年たちに新知識を与えて視野を拡大し、
「精神生活に激甚なる変革」⁽⁴⁾を与えたとされている。

帰国後は農業に従事し、宣教活動からは全く身を引いた。周囲の人たちとはあまり接触することもなかった。教会へも行かなくなり、彼は異教崇拝者ではないのかとさえ言われるようになった。帰国後まもなく妻ルーシーを亡くした後は、フェリシア・ジョーンズと再婚し、晩年は娘ラヴィナと共に過ごして、1930年6月4日、79歳の生涯を閉じた。その葬儀は宣教師としてではなく軍人として執り行われた。

イングについての先行研究

こうしたイングに関する先行研究としては最初に『弘前市教育史』（弘前市教育委員会、1975）の中の相沢文蔵氏による記述や、山本博氏の「ジョン・イングと弘前バンドー津軽の英学（その五）」⁽⁵⁾を挙げることができる。このうち、山本氏の研究は、イングの母校インディアナ・アズベリー大学、現在のデポー大学に所蔵されていた英文資料を活用したもので、昭和6年に刊行された『東奥義塾再興十年史』の記述に頼ることが多かったそれまでの諸研究と一線を画した。また英文で著されたものとしては、東奥義塾で教鞭を執ったこともあるギルバート・バスカム氏の手稿およびアーネスト・E. シェパード氏の著作もあげられる。このうち、バスカム氏の“The Johnny Appleseed of Japan”は、宣教師文書なども活用して書かれている。バスカム氏は、イングや弘前からの米国留学生たちについて現地の新聞史料なども掘り起こしており、津軽地方の近代化を考える上でその調査資料自体が貴重である。またシェパード氏は、これまでのところ、アメリカでイングについてもっとも研究した人物と考えられる。高校の教師であったシェパード氏は、自身もイングが晩年を過ごしたイリノイ州フランクリン郡リバティーチャーチ近郊出身であり、イングと直接接触があったという経験を生かし、イングについての様々な史料を発掘してその伝記をまとめた。このほか、イングについては、ローエル・A. デリンジャー氏の著作もある。日本語の史料に接していないという限界があるものの、イングについての研究としては先駆的価値を持つと思われる。⁽⁷⁾これらの先行研究に基づき、拙著『洋学受容と地方の近代』（岩田書院、2002）の第三章では、それまで知られていた諸資料に加え、デポー大学に所蔵されている大学カタログなどの教育関連史料を活用することで、イング自身が東奥義塾においてどのような教育を行ったのか、その具体的事実に関して考察した。その後「津軽に來たある宣教師の軌跡—「文化」を伝えるものと引きだすもの—」⁽⁸⁾において、イングが津軽東奥義塾に着任する前に宣教師として活動していた中国での状況と津軽滞在時期を比較しつつ、宣教師が介在した文化の伝達について津軽を舞台として論じた。また、「近代教育の中の洋学受容」⁽⁹⁾では、帰国後のイングの状況に注目し、津軽にキリスト教を広めたイングが、晩年、周囲から異教徒ではないかと噂される状況にあったことについて述べた。

以上の先行諸研究により、イングが津軽地方で為しえた業績については、ほぼ明らかにされてきていると思われる。それに比して、イング自身のものの考え方など、その人物像についてはそれほど明確ではない。これは、従来イング自身の筆による史料があまり知られていなかったことがその理由の一つであろう。弘前での影響は大きかったが、彼が日本に滞在したのは約3年半ほどであり、しかも

帰国後はほとんど日本での体験を語らなかったという。⁽¹⁰⁾日本での先行研究で取り上げられたのは、東奥義塾に保管されているイング自筆書簡のコピーが3通のほか、1876年にインディアナ・アズベリー大学の機関紙に掲載された、恩師ウィリー教授あての文章やメソジスト派の報告書に掲載されたもの⁽¹¹⁾などであり、イング自身よりも夫人ルーシーによって書かれた内容のほうが知られていた。⁽¹²⁾東奥義塾所蔵のイング自筆書簡コピーは、1974年9月3日に弘前市において開催された青森県りんご百年記念式典に招待されたジョン・イングの子孫によって東奥義塾に寄贈されたもので、⁽¹³⁾いずれも本国の家族宛に書かれ、日付および差し出し元は次のとおりである。

1874年11月23日（横浜）、1876年9月15日（弘前）、1877年8月14日（弘前）

以上の3通のほかにイングの肉声を伝えるものはほとんど知られていなかったため、イングの人物像は彼と接触した人たちが書き残したもの、あるいはその聞き書きを通して語られてきていた。⁽¹⁴⁾冒頭で述べたように、筆者はイングの自筆書簡を入手した。これは、家族宛にかかれているため、弘前でイングの様子を知る上で極めて貴重な史料となっている。そこで、次に、このときのデポー大学で⁽¹⁵⁾の調査やイング自筆書簡について述べて行きたい。

デポー大学所蔵のイング自筆書簡

デポー大学図書館に所蔵されている東奥義塾関連資料の調査は、すでに1980年代初頭に前弘前大学教授（後、秋田桂城短期大学教授）山本博氏によって行われ、1877年に同大学へ留学した東奥義塾生たちの足跡は、一部明らかにされていた。今回の調査は、もともと山本氏の調査結果を受けて、明治期津軽地方からの留学生の足跡調査を主な目的として企画したものであり、イングの史料が出てくことは予想していなかった。デポー大学図書館でイングの書簡を所蔵するようになった発端は、イリノイ州ウェストフラン克福ォートにあるフラン克福ォート歴史資料館で、イングファミリーを含むいくつかの家族の家系調査をしていたマイケル・ドノバンという人物が、2003年に、ジョン・イングが家族宛にかいた手紙を発見したことによる。ドノバン氏はその内容に驚いて、デポー大学図書館史料室のウェス・W. ウイルソン氏と連絡を取り、フラン克福ォート歴史資料館のヘレン・リンド氏とともに協議した結果、これらの史料は、古文書保管のための条件が整えられているデポー大学に移管されることになった。筆者は、デポー大学のウェス・W. ウイルソン氏のご好意により、デジタル撮影されたデータを入手した。これらのイングの自筆書簡は全部で15通、そのうち14通にはオリジナルに加えてタイプアウトされた紙もつけられていて、日付および発信地は次のように書かれている。

（日本到着前）

- ①1870年2月4日 Ironton, Mo.、②1872年4月11日 Kiu Kiang、③1872年5月28日 Wu Chen、
④1873年6月7日 Kui Kiang、⑤1873年9月5日 Kui Kiang、⑥1874年3月7日 Kiu Kiang

（日本到着後）

- ⑦1874年11月23日 横浜、⑧1874年12月8日 函館、⑨1875年7月10日 弘前、⑩1876年4月14日 弘前、
⑪1876年8月12日 弘前、⑫1876年9月15日 弘前、⑬1877年7月10日 弘前、⑭1877年7月20日 弘前、
⑮1877年8月14日 弘前

以上のうち、⑦、⑫、⑮の書簡は、先に述べた東奥義塾所蔵のものと同一である。⑫だけは、オリジナルがなく、内容をタイプアウトされた紙だけが残っている。このタイプアウトの作成者は不明だが、⑫のタイプアウト用紙の最後に「ウエルトン夫人がサッピングトン夫人と一緒にフェスティバル参加のため現地を訪れた際に、この手紙のオリジナルを学校に寄贈した。このコピーは自分のリクエストによってバスカム氏から送られたものである⁽¹⁶⁾」と説明書とともに、E. E. S とあるので、おそらくイングを研究していたアーネスト・E. シェパード (Ernest E. Shepard) 氏によるものと思われる。これ以上のいきさつは不明で推測の域を出ないが、青森県りんご百年記念式典が行われた1974年当時はまだイングの娘が存命中であり、自宅にあった手紙の中から3通を関係者が日本に持参して東奥義塾に寄贈し、残りはイングの娘が亡くなった後、資料館へ寄贈ということになったものかもしれない。いずれにしても、これらの書簡が、特に日本から出されたものはイングの生の声を伝える貴重な史料であることは言うまでもない。以上の書簡の中で、1874年11月23日分については、山本博氏の「ジョン・イングと弘前バンド」に全文紹介されているので、そちらを参照されたい。ここでは日本から出された⑧から⑮までの内容のうち、弘前での生活をたどれる内容や、イングの活動を考えるうえで興味深いと思われる事柄を中心として、各手紙の時系列に沿って紹介する。

各書簡内容紹介

⑧1874年12月8日 函館

イングは12月7日に函館に到着し、同じメソジスト派のハリスのところではなく、英国聖公会宣教師であるデニングのところに身を寄せた。そのいきさつにかかわる部分は解説不能になっている。

私たちは昨日の夕刻ここに到着し、今デニング師のところに滞在しています。彼と娘さんはとても親切にしてくれています。ここには私たちの宣教ステーションがあり、ハリス師夫妻がおりますが、(不明)⁽¹⁷⁾によって、宿泊することが出来ません。

イングがいつ横浜を出発していつ弘前に到着したのか、これまでの先行研究では諸説あるが、『開拓使公文録⁽¹⁸⁾』によると、12月2日に横浜を出港し、7日に函館に着いたことになっている。上記のようにイング自身の手紙でも7日に函館到着とあるので、同記録の裏付けになると思われる。ここで初めて出会った学生の英語力をイングは評価している。

私の生徒が何人か私たちに会いに遠くから来てくれています。一人は英語をきわめて上手に話しています。⁽¹⁹⁾

こうしてイングは弘前に向かった。それから約半年以上、自筆書簡は残されていない。

⑨1875年7月10日 弘前

この手紙から目につき始めるのは、貯蓄について言及することが多くなることである。当初イン

グは月給150円での雇用で、途中から夫人も教えるようになったため計167円が夫妻に支払われていた。こうした内容は、中国からの書簡にはほとんど出てこない。またこの手紙では、次のような内容がでてくる。

中国や日本の礼儀や習慣、地理、文学などについて、科学的な観察記録や旅行記も加えての外国通信者を希望している新聞社はありませんか？もしあれば、イング夫人も私自身も手頃な報酬でこうした文章を用意することができます。⁽²⁰⁾

イングが日本からの帰国後、東洋での体験をほとんど語らなかったと訃報記事にでていたことについては、前述したとおりである。しかし、ここでのイングにそうした雰囲気はない。実際、夫人ルーシーの書いた日本通信が、女性宣教師文書やインディアナ州の新聞グリーンキャッスルバンナー紙に掲載されただけでなく、イング自身もメソジスト派機関誌である *Central Christian Advocate* にたびたび投稿した。イングの場合は、ルーシーより国際情勢や、あるいは日本の風習などについての記述が多い。中でも明治天皇奥羽巡幸時の東奥義塾生天覧授業について書いた文章は、当事者が語った記録としてきわめて興味深い内容となっている。⁽²¹⁾ いずれにしても、自ら執筆の場を求めていく姿勢は、晩年のイングの様子とはきわめて対照的な様相を見せていると思われる。⁽²²⁾

⑩1876年4月14日 弘前

ここでも、貯蓄に関する内容が語られるが、さらに以下のような記述が出てくる。イングはアメリカにいる両親に送金していたものと見受けられる。

あなたの親切なお手紙が到着する前、私たちは1月末に送ったお金が無事だったのか、心配していました。⁽²³⁾

そして、ここでは、父スタンフォードが農場を購入したことを喜ぶ内容が綴られ、農場の地形や経営にも関心を寄せている。

あなたが、農場について満足しているようなのはとてもよい事です。街のレイアウトについては、私は何と言っていいかわかりません。これは本当にたいへんな一つの事業ですし、たぶんあなたにとってあまりに沢山の仕事があるので、すごく忙しいのではないかと考えています。農場の中を流れる小川がどのくらいの大きさなのか、教えてください。豚や牛を飼おうとしているのは、正しいと思いますよ。私たちは家畜を育てないといけませんね。そうしないと、農場をやっていけないでしょう。たぶん、7月初めとか、そのくらいの時期には、収穫できるのではないかと思います。⁽²⁴⁾

さらに、この頃から具体化してきたと見受けられる東奥義塾生のアメリカ留学の話題もでてくる。

この留学は珍田捨己、佐藤愛鷹、川村敬三、那須泉の4人が自分たちだけで1877年7月にアメリカに向けて出立したが、もともとはイング夫妻と共にアメリカに行く方法をとるつもりであったようだ。ただし、その時期は、実はイングの父が購入したと見受けられる農場の支払い状況に影響されていたことが次の記述からわかる。

私のクラスの3人の若者、もっとも優秀なうちの3人が、⁽²⁵⁾ Mr. Whang も含めて、私たちと一緒に戻ります。Mr. Whang の写真は、以前そちらに送りましたね。4人は全員、インディアナ州グリーンキャッスルのインディアナ・アズベリー大学に入学するつもりでいます。私はこれについて、ウイリー教授にながい手紙を書いたばかりです。私は農場へのお金を支払い終わるまでここを離れませんから、心配しないでください。⁽²⁶⁾

この手紙の日付は4月14日だが、ここにある通り、前日の4月13日付ウイリー教授宛の手紙は、前述のようにインディアナ・アズベリー大学の機関誌アズベリー・レビュー紙 (Asbury Review) に掲載されている。ただ、肉親に宛てた手紙のせいか、ウイリー教授宛書簡には見られない記述がでてくる。東奥義塾生を育てたイングの、自信のほどがうかがえる。

アズベリー大学に行こうとしていると私が述べた生徒のうち、二人の写真を送ります。彼らは⁽²⁷⁾ 素晴らしい生徒たちで、大学で立派にやるだろうと思います。

⑪1876年8月12日 弘前

この手紙では、父スタンフォードの農場で若い日本人を雇用したらどうかという提案がなされる。この若者とは、言うまでもなく菊池群之助のことであろう。インディアナ・アズベリー大学に入学を希望するとした他の東奥義塾生たちについての記述とはまったくことなり、最初から農場で働くことを目的としたことが明記されている。

ちょっとお知らせしておきたいことがあります。正直で英語を話せる日本人の若者（約20歳）を農場で雇いませんか？ここに、教会の会計担当者で、私たちと一緒に戻って私たちの農業の方法を学びたいと願っている人が一人います。彼はすべてにおいて素晴らしく、正直で、信頼に価し、知性的な若者で、私は全面的に推薦できるしあなたもそう思うだろうと確信しています。彼は日本で良い教育を受けていて、かなりの本を持っています。そして英語についてもよく知っています。彼はそれほど頑強ではないので、たぶん最初は牛耕くらいしかできないでしょう。しかし明らかに、強くなっていくと思います。彼は勤勉で粘り強く、もしお父さんが彼を宣教師にするほうが望ましいのではないかという気持ちさえ起こさなければ、彼は農夫として成功することでしょう。というのは、彼は非常に敬虔な若者でもあるからです。もしご希望であれば、私が帰るときに連れて行きます。もし、あなたがそう考えるのなら。彼は、非常に少ない給料で満足すると思います。それは今あなたが雇っているお手伝いに払わなければならない値段の半分くらい

でしょう。彼は、2年ないし3年の滞在を望んでいます。彼自身の旅費は彼の兄弟によって準備されます。もし2年のように長い期間彼を雇えない事態になったときは、彼のために近くの農場を探してあげられるだろうと考えています。彼を住み込みで普通の手伝いと農繁期の手伝いの両方のお手伝いとしたとき、月にどのくらい払いますか。もし彼を連れて行ったら、絶対に役に立つと思います。私はこの事柄について、彼の希望で書いています。もしなにも不都合がなければ、一つの農場でずっと働くことを好むと思います。お父さんは来年、土地を貸すのではなく、お手伝いを雇った方が良いのではないのでしょうか。同じ条件で支払うとしたら、お手伝いはどのくらいお金がかかりましたか？現金で払いますか？あるいはもっと有利に現金以外で払うことができるでしょうか？⁽²⁸⁾

⑫1876年9月15日 弘前

1876年夏は、東奥義塾にとって、7月に青森小学校で行われた明治天皇奥羽巡幸での天覧授業に続き、9月には太政大臣三条実美を迎えるなど、栄光に包まれた時期であった。この手紙には、こうした事柄が述べられている。また、父への送金も変わらず続いている。金の相場があがったことで得られる収益が農場への支払いに回されることも以下の記述から伝わる。

私はお父さんに計500ドル送りました。そして金が値上がりしたので、農場に対してもう一つの支払い方法になることでしょ⁽²⁹⁾う。

日本の総理大臣である三条氏が私たちの学校を先日訪れ、私たちと通訳を通して話したときとても満足そうでした。そして、私が東京に来ることがあったら、訪ねてくるようにと招待してくださいました。ということで、私たちの学校は、ここ数ヶ月の間に、天皇陛下と総理大臣にお会いするという光栄に恵まれたのです。ルーシーも三条氏に紹介されました。おわかりのとおり、私の学校は、今年、栄光に包まれたのです。⁽³⁰⁾

農場とあなたの仕事全般、そして製粉場についても、長い手紙を書いて教えてください。手形に払われたお金の領収書を取ってますか？それとも裏書きをしているだけでしょうか？やはり領収書を取るべきだと思います。すべてを公式にやってください。そうするとすべてがうまくいくだろうと希望しています。⁽³¹⁾

⑬1877年7月10日 弘前

この手紙では、冒頭から利子の計算である。イングは父を案じてか、きわめて細かくさまざまな提案を行い、送金を重ねていた。そんな中で、イングの両親が果樹を育てていたものか、その生育方法に関してミツバチを使うように勧めているのも、後にイングが津軽地方にりんごを導入したと伝えられた事を鑑みると注意を引く記述である。日本から何らかの種子を送り、自らも帰国後に農業に従事するつもりであったようだ。また、最後の引用文からは、仕事に疲れてきている様子も伝わる。

お父さんから5月22日の手紙を受け取ったので、私たちは昨日の夕方とても幸せな気持ちになりました。私の計算によれば、この「為替手形」の全体量は、為替の表面にある691.78ドルを7と16/100を掛けて計算することで、741.31ドルになります。あなたより約67セント多いのです。どちらが正しいのでしょうか？私は古い手形をとっておいて、時間があるときに同じように利子を計算してみるつもりでいます。私は、ジェームスさんによる利子の計算は正確だろうとみています。手形に書いてある「貸地」11.20ドルの意味は理解できません。もしよろしければ、次の手紙で説明してください。ジェームスさんが保管している第二の手形には、どのくらい残っているのでしょうか？⁽³²⁾

もし、家にいて、お父さんのおいしいりんごや桃を食べることができたらどんなに嬉しいことでしょう。もも、りんごのような果樹の実を成らせるには、蜂が手助けになると思われていることがわかりました。私が送った種は育っていますか？農場でも同様にふんだんにつかいたいので、この秋、もっと集めなければなりません。⁽³³⁾

今学期は今月の末におわります。私はこれ以上疲れている人間はいないと断言できるくらいなので、とても喜んでいます。今年の夏はふるさとへ帰りたいのですが、これまでのところ、それはできないようです。⁽³⁴⁾

⑭1877年7月20日 弘前

この手紙の前半では、父スタンフォードがどうやら所属するカンファレンスと軋轢が起こった様子について述べられる。具体的な内容は不明だが、スタンフォードは始めたばかりの仕事を辞職し、上司はいとも簡単に受諾した。年老いた父に対する教会の仕打ちにイングは憤り、さらに、次のように続いている。

私は、教会、カンファレンス、司祭たちに対する信頼をまったく失いました。もはや私は教会の人たちを一般的にいい人という以上には信用しないし、むしろ一般的にいい人ほど信用しないでしょう。カンファレンスは、排他的な人々によって仕切られていて、こうした怪しげな組織に与するには正直すぎる人の場合、遅かれ早かれ壁に突き当たってしまいます。でも私は、あなたが権力を裏で動かしているような人々に屈しなかったことに満足しています。そして、もしそれがほんとに有るならば、ですが、あなたの辞職の理由なのかもしれません。気を落とさないで、そして

暗い考えに立ち向かってください。とりわけ、農場で働きすぎないでください。

私は常に、お父さんやお母さんが働きすぎて体をこわしてしまうのではないかと心配しています。お父さんもお母さんもお手伝いを雇う必要があります。そして、できる最善のことは、それを監督することです。私は、たとえ今すぐにでも、家にいてそれをするべきだと思っています。でも、もし、もう数ヶ月どうにかやっていけるのであれば、私たちは帰国前の現在の義務を果た

すことができるだろうと思うのです。⁽³⁵⁾

この「帰国前の義務」が単に東奥義塾での教育の事を指しているのか、あるいは他に何かあるのか現時点では不明だが、ただ、この手紙からは、すぐにでも年老いた両親の側に帰り役に立ちたいと、母国の両親を気遣うイングの真情があふれんばかりに伝わる。イングが弘前を離れたのは1878年3月7日だが、外務省記録「私雇入表」によると、契約期間は同年7月31日までになっているので、契約半ばの帰国である。これまでイングの帰国理由は夫人の体調が優れなかったことなどが挙げられてきたが、実際には両親との関係も大きく影響していたことがわかる。

また、次にでてくるのは、給与の問題である。イングの給与は前述のように夫人と合わせて月額167円だった。これは開校当時の最初の外国人教師ウォルフ夫妻の250円には及ばないものの、当時の東奥義塾職員の給与が10円にも満たなかったことを鑑みるときわめて高額である。これは東奥義塾の財政を圧迫した。こうした状況を熟知していたイングは、当初特定の教派へ所属しない公会形式で発足した弘前教会を、メソジスト派に属するよう提案した。そうすることで、メソジスト本部から宣教師を外国人教師として派遣してもらえるため、財政的にも負担が軽減するという考えである。こうしたこともあり弘前教会はメソジスト派に所属した。この辺のいきさつを書いているのが次の部分である。ただ、ここでは、今学校から受け取っている給与より67円安いとあるが、実際には東奥義塾から月額67円受け取ったので、総額は従前とかわらなかった。こうして受け取った給与をイングは貯蓄し、父が購入した農場の代金に充てていたようである。このときの送金で支払いは最後になったと見受けられる。

先の手紙に書き忘れましたが、私たちは自分たちの教会の日本支部に所属していて、私の給料もそこから受け取ることになりました。8月が最初となりますが、年に1200ドル、または月に100ドルです。これはとても良い給料ですが、今学校から受け取っているよりは、月に67ドル安いのです。私たちは少なくとも年額600ドルは貯めることができるし、もう少しいくかもしれません。今月の終わりに600ドルそちらに送ることができます。以前書いたように、これが、ジェームズさんの最後の手形を支払うに十分であることを願っています。そして、いかに安く買えるらしいからと言っても、これ以上土地を買うのは私たちにとってあまり賢くはないと考えています。ただ、私の注意を呼び起こしてくれた事への感謝を受け取ってください。私たちはなんとしても、借金を避けなければなりません。⁽³⁶⁾

⑮1877年8月14日 弘前

現在残る最後の自筆書簡は、比較的簡潔で、これは東奥義塾に寄贈されたものの一つである。最後の藍染に関する部分は、すでに拙著で紹介した。⁽³⁷⁾ただ、この部分も、これまでの各書簡の内容を念頭に置くと、単に藍染めをしてみたという程度ではなく、すでに、帰国後を念頭に置いた行動も取っていたことを示唆すると思われる。

前の手紙に書いた為替手形は、私が考えたように700ドル近くではなく、600ドルより少し足りないくらいになりそうです。「一つめ」はすでにそちらに向けて送られています。そして、まだ私は「二つめ」を受け取っていません。それはこの手紙と一緒に届くでしょう。⁽³⁸⁾

私は、今藍を作っているのです、うまくいったら、そのうちすべてを教えてあげます。植物はよく育っていて、今藍染めに変えるため、葉を腐食させています。⁽³⁹⁾

結びにかえて—イングの人物像

本稿で紹介してきたイング書簡の内容から、イングの行動をあらためて見たとき、大きなポイントとして二つあげることができると思われる。「農への関心」と「教会（組織）不信」である。現在残されているイング書簡は、イングから両親宛の一方的なものであり、イング宛の手紙がないので、すべての事情が明らかになっているわけではない。ただ、弘前に落ち着いた後の各書簡に一貫して出てくるのは送金内容であり、また農場や農業に関する話題も多い。推測の域を出ないが、父がやや大規模な農場を購入する際の資金を息子イングが提供したことはほぼ確実と思われる。送金はたびたび行われただけでなく、イングは送金後のお金の扱いにまで気を配った。こうしたことは、中国にいた時期の書簡にはでてこない。日本に来てからの事情と思われる。また、「私は農場へのお金を支払い終わるまでここを離れません」との一言から判断する限り、この状況はイング夫妻がいつまで弘前に滞在するののかということにまで影響した。津軽からインディアナ・アズベリー大学に留学した4人と農業を学ぶため渡米した1人は、当初イングに同道すると書簡にでてくるものの、実際はどちらもイングより先に渡米している。その背景にイングファミリーの経済事情があったと見てよいだろう。こうした経済事情に加え、イングは日本からなんらかの種子を父の農場に送り、その生育状況を気にしていた。また、日本で藍染も経験し、帰国後にも藍染に取り組もうとする気持ちも表されている。彼自身が農業に関心を持っていたからこそその行動と思われる。

また、1877年7月10日付書簡の教会に対する批判内容も注目に値する。イングは帰国後宣教師を辞し、教会にも行かなくなったことは、シェパードらの研究で明らかにされていた。異教徒ではないかとまでうわさされたことも前述したとおりだが、実際、イングの娘ラヴィナが、シェパードの問いに答えて、父イングが信仰に対してきわめて懐疑的になっていたことを示した手紙も残されている。⁽⁴⁰⁾ 中国や日本で優れた宣教師としての活動実績を残したイングが、なぜ帰国後キリスト教から離れたのか、その理由は不明だったが、この教会批判の書簡はそれに対する一つの答えを出してくれている。「こうした怪しげな組織に与するには正直すぎる人の場合、遅かれ早かれ壁に突き当たってしまいます」と発言するにいたった具体的な事情は書かれていないものの、自身が中国や日本で真剣に宣教に取り組んだことに加えて、おそらく父スタンフォードのおかれた状況がなんらかの影響を及ぼしたことも十分に考えられる。農場の問題も教会批判の問題も、年老いた親を案じる気持ちから出てきたということも考えられる。いずれにしても、明らかに言いうるのは、帰国後、キリスト教関係から一切身を引き、農業に従事するというイングの人生後半のデザインは、すでに弘前滞在時代から描かれていたということである。

本稿で明らかにした内容は、肉親に宛てた直筆の史料であるだけに、従来のイング像に新たなイメージを付け加えることにつながると思われる。ただしこれによって、イングが津軽地方に為しえた様々な貢献や業績が否定されるわけではないことも確かであろう。

ジョン・イングという一人の人間が母国に残した家族を思いつつ、自ら負った責任を果たそうとする中でなされた活動が、津軽の文明開化期にさまざまに貢献した。彼の書簡は文化が伝わる時の、人間同士の具体的なかわりを今に伝えてくれるものといえよう。

註

- (1) 東奥義塾は旧弘前藩十二代藩主津軽承昭の援助により旧弘前藩学校を継承して設立された。草創期から外国人教師を雇用したことから、津軽地方に西洋文化が広がった。また自由民権運動など、政治活動の拠点ともなり、単なる学校にとどまらず青森県の政治文化に影響を及ぼす存在だった。財政難のため大正2年に一度廃校となるが、大正11年に再興され、現在は私立東奥義塾高等学校となっている。なお、詳しくは拙著『洋学受容と地方の近代』(岩田書院、2002) 参照のこと。
- (2) 笹森順造『東奥義塾再興十年史』(1931、東奥義塾) p.13。
- (3) 明治9年7月24日付『東京日日新聞』。
- (4) 笹森順造前掲書、p.14。
- (5) 山本博「ジョン・イングと弘前バンドー津軽の英学(その五) 一」『文化紀要』弘前大学教養部、1987、pp.1-33。
- (6) (Bascom, Gilbert E., "The Johnny Appleseed of Japan", Shepard, Ernest E., "A New View of John Ing", *ILLINOIS*, March 1979, Vol. XVIII, No2, 1979, pp.8-18.)
- (7) Dearing, Lowell A. "The Story of John Ing", *Outdoor Illinois* June 1966, The Magazine of Illinois, 1966, pp.14-18.
- (8) 拙著「津軽に來たある宣教師の軌跡―「文化」を伝えるものと引きだすもの―」(河西英通、浪川健治、M. ウィリアム・スティール編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』岩田書院、2005、pp.123-138)。
- (9) 拙著「近代教育の中の洋学受容」『北方社会史の視座』第二巻(清文堂、2008)。
- (10) たとえばイングの訃報記事には、次のように書かれている。「彼の聡明な精神および優れた教養、そして中国や日本の高い教養をもった人々と接触したことによって身につけた礼儀正しさをもって、もし彼の体験を語って入れば、彼の名前はより長く記憶されたことだろう。」(With his brilliant mind and splendid educational training and the polish which he acquired by coming in contact with the most learned men in China and Japan, he could have told a story which would have kept his name alive for many years. "Captain John Ing Dies" *Benton Standard*, June 10, 1920.)
- (11) Ing, John, "Letter from Japan, April 13, 1876", *Asbury Review* June 1876, Indiana Asbury University, pp. 148-149.
- (12) ルーシーによって書かれた中国や日本からの通信は、メソジスト派の女性宣教師文書やインディアナ州グリーンキャッスルの新聞に掲載された。これまでの諸研究では、グリーンキャッスルバンナー紙掲載の弘前に関する記事が活用されている。ルーシーの文章は生活にかかわるものが多く、たとえばそれまでほとんど実態が知られていなかった東奥義塾小学科女子部についても、ルーシーの筆によって描かれており、その一部は『青森県女性史』のコラムとして紹介した。('イング夫人の見た東奥義塾の女子教育'『青森県女性史』青森県、1999、p.27。)

- (13) この事情については、1874年11月23日付書簡を紹介した前掲山本論文の註16に次のように説明されている。「1974年9月4日弘前市に於て開催された青森県りんご百年祭式典に招待されたジョン・イングの子孫 (greatnieces)、Dorothy Zavington、Margaret Wellchin は、イングの娘 Lavinia Marie Ing (1880-1978) が存命であったが高齢のため旅が出来ないので代りに来弘したのであった。その折、東奥義塾を訪れイングの手紙3通を贈った。」
- (14) イングと直接接した人の記述としては、彼の教え子たちがイングについて書き残しているものがある。また、さらにイングと接した人からの聞き書きとしては、1931年刊行の『東奥義塾再興十年史』にある笹森順造の記述が良く知られ、さまざまなところで繰り返し引用されている。そのほか『青森新聞』154号掲載の外崎覚の記事など。
- (15) デポー大学の調査そのものについては、中間報告として以下にまとめた。北原かな子「デポー大学所蔵東奥義塾関連資料調査中間報告」『秋田看護福祉大学付属地域総合研究所報』統合第3号、2008年3月刊行予定。
- (16) Note: Mrs. Welton gave the original of this letter to the school when she and Mrs. Sappington visited there for the Festival. The copy was sent to me by Gilbert Bascom upon my request. E. E. S.
- (17) We arrived here last evening at nightfall and are stopping with the Rev. Mr. Demming of the English Church, “broad”, who with his Dau [ghter] is very kind indeed. We have a Miss [ionary] station here, one Missionary, the Rev. Bro&Sister Harris who were not able to accommodate on account of...
- (18) 1874年12月10日「傭人外国教師家族僕従通行之義ニ付願」『開拓使公文録』所収、北海道立文書館所蔵資料。
- (19) Some of my scholars have come thus far on the way to meet me (us). One speaks English very well.
- (20) Have you any newspapers in your city that desire a foreign correspondent on Chinese, Japanese manners & customs, geography, literature--&c &c--with notes of Scientific observations travel &c&c? If so both Mrs. I & myself are prepared to accommodate such papers for reasonable compensation.
- (21) イングおよびルーシーの投稿記事については、稿をあらためて発表する。
- (22) これについては、2007年12月8日国史研究会例会において口頭発表すると共に（「天皇巡幸とジョン・イングー日米文化交流の一局面を考える」）、その内容を「明治九年東奥義塾生の「天覧授業」についてー文明開化期日米文化交流の中に於ける意義ー」『年報日本思想史』第七号（2008年3月刊行予定）として発表予定である。また、前掲『北方社会史の視座』第二巻（清文堂、2008）所収の「近代教育の中の洋学受容」にも一部紹介した。
- (23) Before the arrival of your very kind letters, we had become somewhat anxious as to the safety of the money forwarded you in January last.
- (24) How well you seem to be pleased with the farm. About laying out the town I hardly know what to say. It is quite an undertaking and perhaps involve to much work for you as it seems to me you must be very busy. Tell me something about the size of the stream running through the farm. I think you are quite right in getting some hogs and cattle. We must grow stock or it'll be quite impossible to make a farm pay. [I] suppose the harvest will be on hands about the first of July or thereabouts.
- (25) Mr. Whang とは、イングが中国から連れてきた黄藩之という人物のことである。詳細は不明だが、イングに中国語を教えていたとも伝えられる（高木武夫『弘前教会五十年略史』日本メソジスト弘前教会、1925、p.300）。ただ、結局 Mr. Whang は留学することはなかった。
- (26) Three of the young men in my classes here, three of the best will return with us also Mr. Whang whose photograph we sent you some time ago. All four are intending to enter Asbury University in Greencastle, Ind. I have just written a long letter to Prof. Wiley concerning the matter. I will not leave here till the

farm is paid so don't fear.

- (27) I send the photograph of two of my students whom I mentioned as going to Asbury. They are fine students and will do themselves great credit in college.
- (28) I have time [for] but a note. Would you like to have a good honest English speaking young Japanese (about 20) on the farm? I have one here a member, the treasurer of the church who wishes to return with us to learn our method of farming &c. He is in every way a nice, honest trustworthy & intelligent young man that I can fully recommend and that I am quite sure you would like very much. He has a good Japanese education & also a considerable book & other knowledge of English. He is not robust and perhaps at first could do nothing heavier than plowing but would evidently grow in strength. He has any amount of industry and perseverance and will succeed as a farmer if father should not find it more desirable to make a Missionary out of him for he is a very pious young man. If you wish I will bring him when I come-if you think.
- He would want very small wages not half so much, as you have [to] pay [the help] you now hire. He will want to stay two or three years. He will be furnished money by his brother to pay his traveling expenses. In the event we could not employ him so long as two years I suppose we [could] get a place for him very easily with some farmer near by. What do you pay for a hand when you board him per month, both the common & harvest hands? He certainly could be made very useful indeed if so I [will] bring him. I write you concerning this matter at his request. He prefers to get a place on one farm if at all convenient. Perhaps you had better hire help next year & not rent. How much would the help cost you in what can you make payment for the same? Must you pay money or can you pay in something else to advantage?
- (29) I have just sent Father the sum of \$500. (five hundred) & the rise in gold to make another payment on the farm.
- (30) Mr. Sanjo, the Prime Minister of Japan, visited my school the other day & seemed much pleased as we talked through an interpreter & he invited me to call & see him should I visit Tokio. So my school, the past few months has had the honor of seeing the Emperor & his Prime Minister. Lucy was also introduced to Sanjo. My school has been covered with honor, you see, this year.
- (31) Please write me long letters about the farm & your work generally, also about the mill. Do you take a receipt for the money paid on the notes, or have the same endorsed on [the] notes only? It seems you should also have a receipt. Do everything formally and I hope all things will be well.
- (32) We were made very happy by the receipt of father's May 22 d [letter] on yesterday evening. I make the whole amount of the last "Bill of Exchange" \$741. 31 or about .67 cts more than you give it, by calculating the face of the bill \$691. 78 at 7 16/100. Which is right? I will keep the old note and calculate the interest on the same as soon as I get a little time. I presume the interest as calculated by Mr. James is correct. The "Land Rent" \$11. 20 endorsement on the note I do not understand. Please explain, if convenient, in your next [letter]. How much remains due on the second note now held by Mr. James?
- (33) How we should be delighted could we be at home [to] take some of your nice apples and peaches. I see it is thought that bees aid very materially in the fruitification of fruit trees-peaches and apples. Please do not forget to tell me in your next whether the 'Seeds grew or not that I sent. I must gather more this fall as I want to have good supply of the same on the farm.
- (34) Our term closes at the end of the present month and I assure [you] I am very glad for never was mortal more tired out hardly than we are [at] this time. Wish we could go home this summer but cannot so far as we now know.

- (35) I have lost about all my confidence in churches, conf [erence] s, Bishops &c and would now trust the same no further than I would men of good report generally and perhaps not quite so far. Conf [erence] s are all managed by cliques and a man that is too honest to connect himself with bodies of such questionable character must go to the wall sooner or later. I am satisfied however that you have never bowed to this power behind the throne and this may explain the necessity, if there was one, of your resigning. Do not be discouraged and give your mind up to gloomy reflections and above all be sure not [to] work too hard on the farm. I am in constant dread lest you and Mother may do yourselves permanent injury by working too much. You and Mother must have some hired help and the most you can do, I should think, would be to superintend the same and I feel that I ought to be at home even now to take that care off your hands but if you can manage to get along a few months longer it would be well for us to remain here a little longer that we may be able to meet our present outstanding obligations before returning.
- (36) I forgot in my last [letter] to say that we have been attached to the Japan Mission of our Church and will begin to receive my salary from the same from the first of next Aug. at \$1200. per annum or \$100. per month which though a good salary is \$67. per month less than we are now receiving from the school. We can save at least \$600. per annum at least and most likely more. I will be able to send you \$600. at the end of this month as I have before written which I hope will be enough to pay off the last note held by Mr. James. I would therefore think it unwise for us to buy any more land now however cheap it may be obtained. Please accept thanks for calling my attention to it however. We must keep out of debt by all means.
- (37) 「青森県における士族授産と津軽藍産業化への試み」『弘前大学教育学部紀要』87号、2002、pp.89-98.
- (38) It is quite possible that the Bill of Exchange referred to in my last [letter] will be an amount a little less than \$600. instead of near \$700. as I then thought. Hope the “First” has already gone forward to you, as yet however I have not received the “Second”. It may reach you with this.
- (39) I am making indigo and will in due time tell you all about it should I succeed. The plant has grown well and I must now rot the leaves so as to convert the same into the dye indigo.
- (40) 1966年7月15日付書簡、デポー大学所蔵史料。

※本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤C、一般、課題番号18520507、H18-19）の助成を受けた研究成果の一部である。

（きたはら・かなこ 秋田看護福祉大学教授）